

重要文化財民家における最大柱幅について

会員種別 ○ 坂井 禎介

民家 大黒柱 木割
柱 寸法 文化財

一 研究の方法と目的

報告書の発刊された重要文化財民家における、最大柱幅について分析するのが本論文である。最大柱幅の数值は、

- A 筆者が実測したもの
- B 修理工事報告書で大半の柱幅の記載があるもの
- C 修理工事報告書で柱幅の代表値のみ記載があるもの
- D 修理工事報告書の図面から計測したもの

をデータとして用いた(表4)。Dの図面計測は精度が低い。最大柱幅が判明したのは197棟であった。

二 既往研究

最大柱幅については、主に「大黒柱」幅という観点で論じられてきた。太い柱や大黒柱の幅に関する指摘は、

- a 指物などが集中することによって太い柱が必要になったという指摘^{注2}
- b 大黒柱幅が時代が下る程太くなるという指摘^{注3}
- c 大黒柱幅が時代が下る程若干細くなるという指摘^{注2}
- d 太い柱が大規模な民家に用いられているという指摘^{注4}
- e 雪に耐えるために柱を太くしているという指摘^{注5}

がある。bとcは相反する。また、a～eは寸法データが示されていないか特定地域に限った柱幅分析であり、本論文のような重要文化財民家に限りながらも寸法データを示した全国的な柱幅分析はない。b, c, eについて本論文において再検証したい。

三 最大柱幅の時代的地域的傾向

各重要文化財民家の最大柱幅の全国平均値は0.80尺で(表1)、全国最大値は高野家の1.97尺である(表4)。これは見える部分を太くした五平柱(見付幅1.97尺見込幅1.78尺)であり、太く見せる意識が明確に読み取れる。全国最小値は0.35尺で、沖縄の中村家等が該当する。

表1の時代ごとの平均値をみると、時代が下るにつれて漸増する傾向が読み取れ、前述のcと反し、bと一致している。ただし、最大柱幅は図1の散布図のように、ばらつきが大きいので、「平均値」でみれば漸増することに注意したい。また、時代が下るほど、最大柱幅の最大値と最小値の差が開いていく傾向が概して読み取れる(図1)。

表1 最大柱の幅の全国平均と各時代の平均

	全国 平均	時代ごとの平均						
		最大	最小	江戸前	江戸中	江戸後	江戸末	明治
母数(棟)	197			12	78	70	29	8
最大柱幅(尺)	0.80	1.97	0.35	0.78	0.77	0.82	0.82	0.88

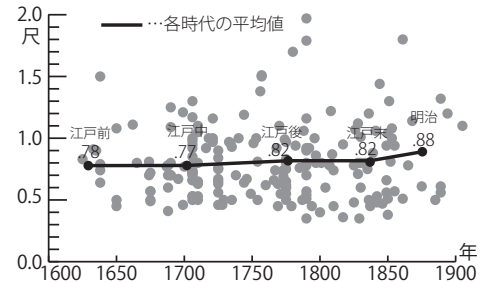


図1 最大柱幅の散布図

地域ごと^{注1}の平均値は、下表のように東北は0.94尺、甲信・北陸は.84～.87尺、近畿・中国は.79～.81尺、東海は.75尺、四国・九州は.59～.66尺と、北国ほど最大柱幅の平均値が大きいことは注目される。

表2 地域ごと^{注1}の最大柱幅平均

	地域							
	東北	甲信	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州
母数(棟)	26	36	20	19	44	22	12	18
柱幅(尺)	0.94	0.84	0.87	0.75	0.79	0.81	0.66	0.59

では、北国ほど最大柱幅が太いということは、積雪量と最大柱幅が比例している(e)ののだろうか。各民家の積雪量毎の平均をとったのが下表である。1990年の最大積雪量が50cm以上なら「多」、10～50cmなら「少」、10cm以下なら「無」とした^{注6}。下表のように積雪が多いほど最大柱幅が大きい数値をとり、前述のeと一致する。

表3 積雪量毎の平均最大柱幅

	多	少	無
	母数(棟)	54	53
柱幅(尺)	0.92	0.80	0.73

四 結論

重要文化財の各民家の最大柱幅は、全国最大が1.97尺で平均は0.80尺である。時代が下るほど最大柱幅の平均値が大きくなる傾向があるが、ばらつきが大きいことに注意したい。地域的には北国で太く南国で細い傾向があり、大方積雪量と比例している。

